

促成イチゴの生理生態に関する研究

第3報 親株前歴がランナー発生・苗確保数に及ぼす影響

新井和夫・松尾誠介

(野菜試験場久留米支場)

イチゴの促成栽培では良苗を十分な本数確保することが重要な技術の一つである。しかしながら実際栽培では労力面や苗床、親株確保のわずらわしさから専用親株を養成しない場合も少なくない。またランナーや子苗の発生に影響する親株の生理生態的特性も必ずしも十分明らかとはいえない。そこで本報では前歴を異にする親株の

ランナー発生と子苗生産について調査した結果について報告する。

1. 試験方法

“はるのか”、“宝交早生”、“ダナー”の3品種について、①専用株、②加温生産株、③加温 GA 処理生産株、④加温 GA 電照処理生産株の各親株（ダナーの②は欠区）を親株床に植えつけ（1979年4月6日）、親株の生育、ランナーの発生、子苗の生産数を調査した。

2. 試験結果及び考察

1) 親株の生育（第1表）

親株の生育は一般に冬季低温に遭遇した専用株の生育が勝ったが、その他の前歴株でも極端なわい化傾向はなかった。

2) ランナーの発生及び子苗の生産数（第2表）

ランナーの発生は、“はるのか”が早くかつ多く、親株の前歴の違いでは、専用株>加温・GA・電照>加温・GA>加温・無処理の順で劣った。他の“宝交早生”、“ダナー”でも同様の傾向であった。しかし専用株以外でのランナー発生はきわめて少なかった。子苗の生産数もランナー発生の結果と同様な傾向であった。

以上の結果から、ランナー発生・子苗生産を良くする親株の条件はまず第1に低温遭遇であり、生産株での電照・GA 処理もわずかに関係があったが、“はるのか”以外では実用的に苗確保が困難であろうと推察された。

第1表 親株の生育

品 種	専用株 月 日	加温生産株			
		無処理	GA処理	GA+電照 処 理	
(生葉数)					
はるのか	4.6	12.7	17.2	12.6	18.2
	7.2	27.0	39.6	47.0	41.8
宝交早生	4.6	17.2	20.2	16.0	17.3
	7.2	57.2	39.4	43.8	51.8
ダナー	4.6	14.0	—	8.2	11.3
	7.2	37.0	—	22.8	30.7
(葉柄数)					
はるのか	4.6	8.7	8.9	8.0	19.4
	7.2	17.1	14.3	14.9	13.1
宝交早生	4.6	5.2	5.4	4.4	5.8
	7.2	12.8	12.2	10.8	12.7
ダナー	4.6	1.0	—	3.1	7.3
	7.2	16.4	—	9.5	11.7
(葉長)					
はるのか	4.6	9.1	6.8	7.2	11.9
	7.2	10.6	9.1	9.9	8.7
宝交早生	4.6	5.4	5.0	4.9	6.1
	7.2	8.6	7.2	7.3	7.5
ダナー	4.6	8.0	—	4.6	8.0
	7.2	10.4	—	8.5	9.7

第2表 1次ランナー発生と苗確保数(株あたり)

調査日	専用株			加温生産株(無処理)			同・GA処理			同・GA・電照処理		
	はるのか	宝交早生	ダナー	はるのか	宝交早生	ダナー	はるのか	宝交早生	ダナー	はるのか	宝交早生	ダナー
4月10日	2.1	0.4	0	0	0	—	0	0	0	5.2	0	0
5月1日	8.0	1.8	0	0	0	—	0	0	0	6.4	0	0
21日	14.7	11.8	6.0	0	0	—	1.4	0	0	7.0	0	0
6月11日	21.9	18.6	16.0	7.6	0	—	11.2	0	0	9.6	0	0.2
21日	23.9	22.2	20.0	12.8	0.2	—	17.3	0	1.8	12.4	0.2	3.0
7月2日	26.7	23.4	24.0	15.4	1.4	—	17.3	2.6	4.8	18.2	2.3	5.8
子苗数*	79	49	38	12	0	—	23	0	1	41	0	0

a : 7月2日 発根苗数